

叢書・ユニベルシタス

歴史と文芸批評

G. デルフォ／A. ロッシュ 著

川中子 弘 訳



歴史と文芸批評

ジェラルド・デルフォ
アヌヌ・ロッシュ

川中子 弘 訳

訳者紹介

川中子 弘 (かわなご ひろし)

1944年生。早稲田大学文学部仏文学
科卒業。フランス文学専攻。早稲田
大学講師。訳書：ベルール『構造主
義との対話』(共訳)，ブリュネル 他
『文芸批評の新展望』(共訳)

《叢書・ユニベルシタス》

歴史と文芸批評

1986年3月25日 初版第1刷発行

G. デルフォ/A. ロッシュ

川中子 弘 訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1

電話03(237)1731／振替東京6-95814

製版，印刷・三和印刷／鈴木製本所

© 1986 Hosei University Press

1390-11183-7710 Printed in Japan

この著作は一九七一年五月のパリ・コムニオン百年を記念する歴史家たちの討論会に端を発する共同研究が実を結んだものである。

著作の内容は、パリ大学第七分校でミシェル・ペロとジェラル・デルフォが主宰した「歴史と文学」という学際的な計画研究に際して、およびプロヴァンス大学の故ベルナル・ギュイヨンのゼミと、ジュヌヴィエーヴ・ムイヨ、アンヌ・レオニと共同で担当した有効単位講座「社会主義的思想」と「媒介分析」においてアンヌ・ロッシュによって、すでにそれぞれに実験的に公表されている。それはまた、アラン・メイユール、ジャン＝ジャック・フォル、クロード・デュシエ、ジャン・ルヴァイヤン、そしてマドレーヌ・ルベリウといった方々の熱心なあたたかい助言をいただいた。本文の第七章―第十三章は主にアンヌ・ロッシュが、第一章―第六章、第十四章―第十五章は主にジェラル・デルフォが執筆をうけもった。

凡 例

一、本書は Gérard Delfau & Anne Roche, *HISTOIRE/LITTÉRATURE, Histoire et Interprétation du fait littéraire*, Éditions du Seuil, Paris 1977. の全訳である。
一、原注（原書での脚注）は各章ごとに行間に（１）、（２）…で示し、同様に訳注は（一）、（二）…で示して巻末に一括した。ただし比較的短い訳注は本文あるいは原注で「」内に示した。

一、著者による他の著作からの引用文に対する補足は「」で、訳者による補足は訳注と同じく「」で示した。

一、原文のイタリックの箇所は、それが強調の場合は傍点を付し、書名、あるいは雑誌・新聞名を表わす場合はそれぞれ『』、へゝを用いた。ただしへゝは大文字で始まる普通名詞にも使用してある（Histoire ↓ 〈歴史〉のように）。

一、原文の《》はそのまま踏襲し、長い引用文の場合は「」に変えた。ただし「」は論文名や短篇小説の表題にも用いた。

一、読者の便を図るため原書にはない索引を付したが、収載項目は本文のみを対象とし原注・訳注の中のものには割愛したうえ、網羅的ではないことをお断わりしておく。

序文 歴史／文学

文学という事象の周囲には、あれやこれやの解釈学がとてついついてゆけないほどに増殖し、読者や教師、要するに趣味や職業から作品とは何かを問おうとするあらゆる人々を困惑におとし入れている。そこで彼らは解釈的試みなどいっさい断念しよう、衛生無害な《個人的》読みをやっていればそれで良いのだと思いかねない按配なのである。ところがこの個人的読みというのは、あれこれの既成概念の寄せ集めであって、そうであるとはつゆ知らないだけに奥深くイデオロギーに隷属している。

文学に携わる者はこの問題にはことのほか拙劣な武装しかしていないか、またはそうだと自分では思いこんでいる。ようやく心理学や社会学の悪夢から立ち直って、少しは言語学の素養を身につけたかつけないうちだというのに、今度は、どうやら手なづけられるようになりはじめたエディプスから構造にいたる怪物たちの死という事態に、慣れなくてはならないのである。

文学に携わる者といえばわれわれもその末席に連なるものである。そう断わるのもわれわれの立場を示すことで、以下のテキストがまるでひとりで口をきいているかのような幻想を抱かせまいとするためなのである。ここでわれわれは、諸解釈の迷路のための手引き書を目指しているのではない。それにはわれわれに欠けている能力が必要となろう。われわれが試みるのは現状をわれわれなりに明確に把握すること、われわれの探求、つまりわれわれの方法と目的を示すことなのである。テキストに向いあう時それを自分

に取りこむ二つの——かなり似通った——仕方が生まれる。快楽（何を読むのが好きか？ 何故？ それをわれわれは知っているか？ それはわれわれをどこに導くか？）、それと同時に研究である。テキストは『一八四四年の草稿』の自然についての考えを読みかえれば、『われわれの非構造的な身体』なのである。テキストがわれわれの現実となるのだが、この現実とは『外「テキスト」ないし「下部テキスト」に向う脱中心化と、『ただテキストのみ』への近視眼的な焦点収束との葛藤の渦中にある。そこにどうすればわれわれなりの成算の見込みは立つのだろうか？ いかに読むのだろうか？ われわれが対決してみようと思うのはこの『解決不可能な』問いなのである。

われわれは文学という事象を読みとる新旧さまざまな解説形態の目録をつくるのでも、文学と歴史の『境界』史を書くというのでもない。ここで目指しているのは、なにもわれわれ独自というのではないが、歴史を鍾線がわりに使用するところにある。ただこの歴史には修辭学的分析が連接しており、この二重の要求のおかげで、一方では人為的、反歴史的なフォルマリズムの危険を、他方ではもっぱら内容分析を軸とする実証主義的な歴史主義の危険を回避しうるはずなのである。

ところで文学の歴史性といっても、勿論そのレベルは幾つもある。ゴルドマンの追求した作品の生産——作者、社会集団——のそれ、R・エスカルピとI・L・T・A・Mが研究する作品の生産と配布のそれ、また作品の読みのそれという具合に。便利な区別ではあるが問題がないわけではない。ピエール・マシュレーがいみじくも指摘しているように、「本の伝達条件は本と同時に生産されるものであり「……」、本を作るものはその読者も作りだす」⁽¹⁾からである。

以上のことを念頭においたうえでなら、この諸レベルの理論史を概略的に描けもしようし、そこで使われたさまざまなタイプの方法をその歴史との関係に即して判断することもできるだろう。歴史（歴史イストワール）

現実)の駆動的役割を物語^{イストワール}Ⅱ文学(ディスクール)のなかに浮びあがらせることは、なにより、文学という事象について現に《語っている》人文諸科学の境界を弁別する手掛りとなり、それによって折衷主義に陥る危険を免れさせてくれるだろう。

ところでわれわれとしても知らないわけではない、学科としての歴史がしばらく前から文学研究者たちの眼に、言語学、精神分析学、民俗学などと比べてなにか貧しい親戚ぐらいにしか映っていないことを……われわれが提案するのは優越した位置の学科として歴史を再創設することではなくて、先覚者のひとりマルクスが与えた決定的役割を歴史に再投入することなのである。「歴史による心理学の説明ではなく、心理学による歴史の説明を目指す」ものだとポリツェールの指摘する精神分析学へのその批判は、文学に適用すればわれわれの指導方針の一つともなりうるだろう。

ところがたちまちいろいろな難問が立ちはだかつてくる。こうした計画を首尾よく成就するには、経済的な生産諸関係の一状態と文学生産の一状態との媒介論の問題を正確に余すところなく提示し、かつ解決しうるだけの能力を必要とするのに、それがわれわれには欠けているのである。同様にこうした分析を歴史的流れのどこか一点に即してすすめるには、具体的な史的材料を揃えていなければならないのに、この点でもわれわれはいまだ道遠い状態なのである。ルカーチの『歴史小説論』——幾多の点で豊かな示唆を含むのだが——におけるあの一般化や欠落を思いおこしていただきたい。⁽²⁾

こうした障碍はあるものの、研究の計画自体はたとえかりそめのユートピア的なものであれ、描いておく必要はあるように思われる。たしかにこの賭けで得られる利益には甚大なものがあるし、それに歴史を中軸的役割を持つものとして創設するという目的は、見掛けがどうあれすでに達成されたことではなく、一般に容認されたことですらない。たとえばランソンに代表される古典的な文学史の場合、それを不適

格としてはねつけるにせよ、《フォルマリズム》の悪弊への反撥からそれを《再発見する》にせよ、いずれも第一次的歴史の次元を脱しているわけではない。すなわち、こうした《歴史家的》意図をもつ探求傾向がいかにして（物語としての）歴史と（現実の）歴史のある種の状態を媒介するものであるか、という問題が一九〇〇年当時も一九七六年の今も同じように、提起されていないのである。同様に、物語^{イストワール}文学の現代の諸傾向においては、《歴史的》たらんとするのであれ《反歴史的》たらんとするのであれ、そのあるものは自立的学問としての成立を遂げようと一時的に歴史離れをし、またあるものは歴史に主軸を合わせたつもりでいるが、実際は余りにもしばしば単なる反映理論に依拠しているにすぎないという風である。後にもるように反映理論は人が思いたがるほど見棄てられてはいない。つまり《歴史と文学》の信用の相対的な失墜という事態から推察しうることは反対に、この問題は凌駕されているどころか、実際には（再）提起すべき性質のものである。

目次

序文 歴史／文学

ix

第1部 批評の誕生 一八三〇—一八六〇年 1

第1章 十九世紀における批評成立の諸条件 3

第2章 文芸批評という職業 25

第3章 テーヌ、あるいは学問の未分化への終止符 44

第2部 世紀の曲り角 一八八〇—一九一四年 69

第4章 実証主義的クリオ

——(1) オーギュスト・コントかカール・マルクスか？ 71

第5章 実証主義的クリオ

——(2) オーギュスト・コントかカール・マルクスか？ 98

第6章 実証主義的クリオ

——ランソンの『文学史』

142

第7章 実証主義的クリオ

——ペギーとブルーストの反撥

180

第3部 三〇年代

203

三〇年代に関する数章への序文

205

第8章 三〇年代

——(1) 精神分析

211

第9章 三〇年代

——(2) マルクス主義

221

第10章 三〇年代

——(3) フランクフルト社会研究所と

《フロイト・マルクス主義》

235

第11章 三〇年代

——(4) フォルマリズム

253

第4部 今日のための考察 269

まえがき 271

第12章 精神分析／文芸批評、そして歴史的問題

273

第13章 形式の破壊と歴史批判 286

第14章 マルクス主義的アプローチの閉塞と出口

——(1) マルクスへの回帰 296

第15章 マルクス主義的アプローチの閉塞と出口

——(2) 反映理論か、世界観理論か、

またはイデオロギー理論か？

323

原 注 357

訳 注 412

訳者あとがき 432

書誌案内

索引（人名／事項）

第1部

批評の誕生

一八三〇—一八六〇年

第1章 十九世紀における批評成立の諸条件

人文科学に対する姿勢は今なお共通して広範に実証主義の影響下にある。歴史学、哲学、社会学、文芸批評は西欧文明とは切り離せないものとみなされているが、それらが依拠しているのは科学的知の決定的だが旧式の截断なのである。現代的な認識論（バシュユール、カンギレム、フーコー）の登場にも拘らず、これらの学科のどれもが断絶なしに展開しているかのような印象が拭いがたくはびこっている。これらの学科の起源、模索、飛躍的前進、意味論的場における転移、停滞、後退期などを見さだめるのは、今なおわれわれには不可能に近い。これらの学科領分を分割する境界線がつい最近の十九世紀になって引かれたこと、境界はしっかり固定せず今なお可変的だということは余り知られていない。《先駆者たち》でみちあふれていないある時代、ある《前代》を想像するのは努力を要するのである。認識の光景が根底から変貌しているような可能な《後代》の想定となると、精神はそれを《科学》、ないしそのアリバイとしての《進歩》の名において拒絶する。これは結局ありふれた指摘にすぎないのに、しかし歴史記述、批評の歴史、社会学の歴史にほとんど何の影響も及ぼしていないのである。この閉塞状況の理由は、われわれが非連続、差異、ましてや断絶というものを考えないことに由来する。とはいえ、ジョルジュ・カンギ

レームがその活路を示してくれたのはもう一〇年も前に遡る。彼はバシュラールの創始した《科学史の新記述法》に関する省察のなかで、はっきりと述べている。「この歴史はもはや、博物学式の伝記的収集とか教説の一覧表であってはならない。それは概念的系譜の歴史でなければならぬ。とはいえこの系譜は、メンデルの遺伝の法則がそうであったように非連続を規約のうちに含みこむものである。」⁽¹⁾なるほどこの定義は、いわゆる厳密科学の領域に向けられたもので、文学・芸術が想を汲みだす夢という恒久的資源や想像の世界をおもて向きは除外している。しかし、サント＝ブーヴ以来の批評的実践がすっぱりそこに収まってしまふ《伝記的収集》を乗りこえようと志す者にとっては、方法的な訓示としてなお傾聴に値するものがある。今日すべてが、この乗りこえを、文学への新しい視線をもとめているのだ。時代的距離——一世紀——、意味論的磁場の充実と交叉、ミシェル・フーコーが企図した概念と学科の再編成、そして最後に諸イデオロギー的所産の歴史性をあらわにすることをやめないマルクスの仕事などすべてが。自らの過去に自信を抱く老貴婦人ともいうべき哲学でさえ、永遠という座を降りて、フランソワ・シャトレのように、哲学の歴史を語ることは《さまざまな差異を書きとめる》⁽²⁾ことなのだと言いはる始末。要するに、同じ質問を文学テクストの解釈に関して測定してみる時期が到来しているのだ。そこでまずこの学科の歴史性、つまり今日批評と呼ばれているものの、破碎され亀裂の入った不分明な歴史の筋道をつけることが要請される。それには従来やられてきたこと、跛行的出発、空白、断絶、後退、視界の混乱などのせいで跡切れ跡切れにならうとも、なんとか一つの歴史を出現させようと展望、受賞者名簿または一覧表を作成するような仕方とは正反対の道をとらなければならぬまい。諸学科の未分化から、どのように批評、歴史学または社会学の制度が誕生したのか？ どのように、あるいはむしろ何故、批評は生まれたのか？ これがわれわれの最初の問いとなるだろう。次にくるのは批評の方法自体に関する根本的な問い、〈歴史〉

が将来考えうる文学科学との間にとり結ぶ諸関係の検討である。ご覧のように、〈歴史〉は方法論的道具であると同時に指示対象として、二つのレベルでアリアドネーの導きの糸となるだろう。

文学的事象の周囲に繰りひろげられるこの増大する一方の活動を外から判断しようとする者を驚かせるのは、一世紀を闊したこの学科の規定がいまだに不明確だということである。このことはまずそれを指す用語の曖昧さと増加のうちに窺われる。批評、文^{イストワール・リタレール}学^{イストワール・ド・ラ・リテラチュール}、史、文、学、の歴史、最近では文学科学、またはテキスト科学などとさえいつている。ところで命名しえない学科とはなんなのであるか？ 同じ不確実さが、一時代の文学的生産の判断に従事する人々の社会的身分にも付きまとう。リセや大学の教師、新聞やラジオの劇評家、文学好きのエッセイスト、フローベールについて独白する『家の馬鹿息子』のジャン・ポール・サルトル……彼らの文学への関係の仕方はみな同じであろうか？ ある者においては教育的配慮が、他の者においては研究への無償の情熱が優位をしめている。ジャーナリストは第一に社会的責務を果たし、以前のなんらかのテキストを語る作家は、たしかに特殊ではあるがすでに自分の内的経験のなかに統合された材料から出発して、じつはえてして自分の作品の続きを語っているのにすぎない。この雑然たる状態はさほど重大ではない、という反論もあるだろう。一部の批評家はなにより通俗的普及者であり、残りの人たちが辛抱強い探求を重ねて作品の新しい読み方を切り拓く真の批評家なのだから、と。だがそんな区分が簡単にできるのだろうか？ 因みに、テキストそのものに関心をそそぐ批評と、ジャンル、党派、作者別の目録づくりや分類に明け暮れる文学史という伝統的な区別も、やはり怪しいものなのだ。すでにランソンは批評の課題の無益な細分化を糾弾して、文学の考察はどれも『文学史』——彼にとって言葉の重心は史にある——と呼ぶことを提唱していた。このランソンの決定的な貢献については